

SYŌNEN SYŌZYO

Sekai Bungaku Jemoyū



語 昔 物 今
語 家 物 平
記 平 平 太

ほか3編

少男少女

世界文学全集

東洋編(4)

たからのひょうたん

張 天翼 作・倉石武四郎 訳

三人の先生

朱 明 政 軍 作・伊藤貴麿 訳

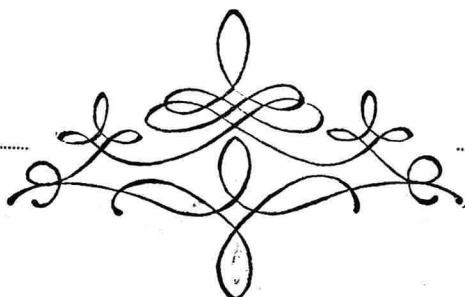
故郷・宮しばい

魯 迅 作・竹内 好 訳

ほか13編

講談社

44



少年少女世界文学全集 44
東 洋 編 第 4 卷

著者の了
解により
検印廃止

N. D. C. 923
講 談 社 昭和 37
418P 23cm

昭和 37 年 8 月 20 日発行

訳者代表	伊	藤	貴	磨
発 行 者	野	間	省	一
印 刷 者	北	島	織	衛

発行所 東京都文京区音羽町 3ノ19 株式会社 講 談 社

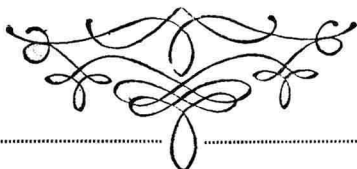
振替口座東京 3930 電話大塚 (941) 大代表 3111

印 刷 大日本印刷	背 皮 株式会社石井
製 本 大 進 堂	クロス 日本クロス
本文用紙 本州製紙	

定価 420 円

© 伊藤貴磨 昭和 37 年

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします



PRINTED IN JAPAN

目 次

少年
少女

世界文学全集

第 44 卷
東洋編第 4 卷

たからのひょうたん……………張天翼作
倉石武四郎訳……………5

三人の先生……………朱明政・朱明軍作
伊藤貴麿訳……………163

小つばめの大飛行……………秦兆陽作
伊藤貴麿訳……………211

みみずとみつばちの話……………巖文井作
君島久子訳……………229

しつぽをふるおおかみ……………巖文井作
君島久子訳……………238

鳥のことば……………米星如作
伊藤貴麿訳……………240

みみずの歌……………米星如作
伊藤貴麿訳……………254

阿柳と百霊鳥……………米星如作
伊藤貴麿訳……………264

長^{ちやう}生^{せい}塔^{とう}

松巴
枝茂
金作
夫
369

か
か
し

松葉
枝紹
釣作
夫
284

故^こ郷^{きやう}

竹魯
内
好迅
作
夫
295

宮^{みや}し
ば
い

竹魯
内
好迅
作
夫
307

楚^その覇^は王^{おう}の自^じ殺^{ころ}

松郭
枝沫
若作
夫
321

寂^{せき}寞^{ばく}

倉謝
石武
冰心
作
夫
339

小
さ
き
友
へ

倉謝
石武
冰心
作
夫
358

わ
か
れ

倉謝
石武
冰心
作
夫
372

松^{スシ}子^ツ

伊丁
藤貴
玲作
夫
385

解とく

説とく

訳

者

400

読よ

書し

指し

導ど

滑くわ

川かわ

道どう

夫ふう

413

読書指導研究会

今

村

秀

夫

413

装

本

池

田

仙

三

郎

さ

し

え

久

米

宏

一

李

天

心

安

泰

池

田

仙

三

郎

吉

井

忠

永

井

潔

永

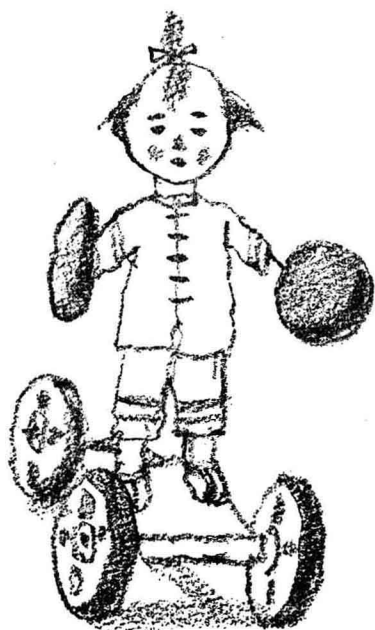
井

潔

たからのひょうたん

ちよう 天 よく さく
張 天 翼 作

くら いし たけ し ちろう やく
倉 石 武 四 郎 訳



「^{ようりよう}要領をえないように^{ようりよう}要領をえたものは、なあたからのひょうたん に。」

に つ い て こういったなぞなぞがあったとしますと、いちばんよくあてはまるのは、「ひょうたん」にちがいありません。つるつるして、まるで手がかりがなく、そのくせ、ただのまんまるでなしに、くびれがあって、それも、上がちいさく、下がおおきい。とても^{あんてい}安定がとれているのです。

この全集のなかの「^{さいゆうき}西遊記」にも、「たからのひょうたん」が^で出てきて、あのちいさい口から、すると、あくまをすいこんでしまいます。すいこまれたら^{さいご}最後、もう^で出られません。ところが、このお話の「たからのひょうたん」は、なんでもほしいものを^だ出してくれるのです。^{にっぽん}日本でも「ひょうたんから^{こま}駒」といいますが、^{ちゆうごく}中国の「ひょうたん」は「^{こま}駒」だけでなしに、なんでも^だ出してくれるのです。

けれど、ひとつ、たいせつなことがあります。その「ひょうたん」が^だ出してくれるのは、^{げんざい}現在、どこかに^{せんざい}存在しているものでなくてはなりません。また、もっとたいせつなことは、いまの^よ世のなかで、この「ひょうたん」を手にいれたひとが、しあわせかどうか、ということです。どうか、みなさん、ワン・バ^{くん}オ君のお話を、よく^き聞いてくださいね。(倉石武四郎)

さしえ・^{く め こう いち}久米宏一

ぼく、これからお話をします。けど、その前に、ぼく自己紹介をしておかなくちゃ。ぼく、ワンです。ワン・パオといひます。ぼくのお話というのが、このぼくのこと、いえ、ぼくとたからのひょうたんのことなんです。

という、

「なに、たからのひょうたん？ ああ、むかしはなしにあるたからのひょうたん？」なんていう人があるかもしれません。

そう、そのとおり、あなたからのひょうたんなんです。

ですけど、ぼく、ちゃんといたっておきますが、ぼく、神さまでもないし、おばけでもありません。みんなとおなじ人間です、あたりまえの人間です。このとおり、少年先鋒隊のもんです。それに、ぼく、みんなとおなじように、お話をきくのがだいすきなんです。

たからのひょうたんのお話っていうと、ぼく小さいときからよく知っています。なぜって、うちのおばあちゃんがぼくにお話してくれるんですもの。おばあちゃんがぼくになにかさせようというときには、お話をしてくれないとだめなんで

す。そういうふうにきめといたんです。

「ねえ、パオちゃん、いい子だから、あんよあらってあげるよ。」

おばあちゃんはぼくをおつかけながら、おいでおいでします。

「ぼく、いや、あつゐから。」

ぼくは、にげだしながら、いやいやをします。

「あつくないってば。さつきからさましてあるのよ。」

「なら、つめたいから。」

おばあちゃんはぼくをつかまえて、あつくもない、つめたくもない、ちょうどだから、どうでもあらうんだといひます。

そうになると、ぼく、譲歩しないわけにいきません。でも、条件があるのです。

「おばあちゃん、あらいたけりゃあらわしてあげる。けど、なにかお話を。」

こういうぐあいにして、おばあちゃんが、たからのひょうたんのお話をしてくれるのです。

「パオちゃん、いい子だから、じつとして。」おばあちゃん

は足をあらつてくれたと思うと、またあたらしい条件をもちだすのです。「ちよつと切らして……」

えつ、つめを切るつて？　そいつはだめ。ぼくは、はだしのまま、ぱつととびおりて、にげだすのです。けど、うでは、もう、おばあちゃんにつかまれていて、どうにもなりません。こうなると、ぼくはぼくで条件をだすことになります。

「じゃ、お話を、きつと。」

というわけで、おばあちゃんはまたひとつお話をします——それがまた、たからのひょうたんです。

こうしてぼくは、ごく小さいときから、おばあちゃんのお話をききました。十ばかりになるまで、いつもきいていたんです。おばあちゃんのお話は、そのたんびにちがうのです。

この前は、春ちゃんが神さまにでつくわして、たからのひょうたんをもらった話、こんどは夏ちゃんが遠足のときに、龍宮までおよいでいて、たからのひょうたんをもらった話、それから、秋ちゃんていい子で、おばあちゃんにおべをきかえさせてもらったから、たからのひょうたんをもらった、もひとつ、冬ちゃんが手にいれたたからのひょうたん——それは畑の中からほりだしたんですつて。

春ちゃんにしろ、夏ちゃんにしろ、たからのひょうたんを手にいれたら、とつても、しあわせになるんです。ほしいものは、なんでも出てくるんです。春ちゃんが、「すいみつをたべたい。」と思うと、すぐに、すいみつが、おぼんにいっぱい出てきますし、夏ちゃんが、「大きなぶちいぬほしい。」というとき、あつというまに、そいつが出てきます——夏ちゃんのほうをむいて、しつぽをふりふり、夏ちゃんの手をなめるのです。

それからだつて？　それからは、もちろん、みんな、とつても、しあわせにくらせるのです。

ぼくは、こういうお話をききますと、いつもじぶんだったら……と考えるのです。

「ぼくもし、たからのひょうたんを手にいれたら、どうしようかしら。なにをたのんだらいいかな。」

ぼくは大きくなってからも、ときどき、たからのひょうたんのことを思い出します。算数の問題をかかえて、式をどうたててよいか、わからないでいるときなど、8という字の私たちから、たからのひょうたんを思いだすのです——もし、こいつが手にはいいたら——

「らくちんだがなあ。」

ぼく、お友だちと、ひまわりをうえる競争きさうをしました。ぼくんちのは、みんな、ひよろながくなって、上に小さいんこぶがひとつ、とってもかわいそうなかつこうです。どのお友だちにだって、かないっこないのです。すると、ぼくまた、そのたからものことを思いだします。

「じゃ、ぼく、とってもいいひまわりを一本ぽんもらおう、だれ



のよりすばらしいひまわりを一本ぽん。」

いいえ、それはただのまぼろしです。

けど、ぼくはやっぱり思いだすのです。いつだったか、科学班がくはんの友だちとけんかをしたときぼくまた思いだしました。

「もしぼくが、そんなひょうたんをもっていたら……。」

あつそうだ、はじめっからお話はなしなくちゃ。

二

あの日は日曜にちようでした。ぼくは九時きゅうじに朝御飯あそめいをすますと、すぐ学校がっこうへすつとんでいきました。なぜって、ぼくたち科学班がくはんで電磁起重機でんじきりゅうきをこしらえることになっていて、それが十時じゅうじにはじまるのです。

けど、その日は、ほんとにおかしいのです、お友だちは、

ぼくとばっかり、いいあいするんです。ぼくはヤオ・チュンと将棋しょうぎをさしました。どう見たって、ぼくのほうが有利うりなんです。ぼくはヤオ・チュンの「車くるま」をひとつ、ぼくつてしました。そのとたんに——どうしたとか、ヤオ・チュンの「馬うま」が横あいから出てきて、ぱつと王手おうてをかけるのです。それを見たぼくの「元帥げんすい」が動うごいていつて、あいてをか

わそうとしました。見ると、まむかいに「大砲」がひとつ、砲車を前において、じつとすわりこんでいるじゃありませんか。ぼくはヤオ・チュンにきました。

「きみのその『大砲』、どうしてそこにおいてあるんだ。」

「ずっと前からここにあるんだよ。」

「なに、ずっと前から？ それがぼくにわからんなんて。」

「そりや、きみがわるいのさ。」——へん、よくもいいやがった。

ふたりはけんかをはじめました。それに、将棋を見ていた友だちはヤオ・チュンのほうにひいきして、ぼくがわるいといえます。ぼくは将棋盤をぐっとおしやって、いいました。

「やめた、やめた。」

それからあと、いよいよ電磁起重機をつくることになって、こんどはスー・ミンフォンがぼくといあいをはじめました。

スー・ミンフォンといっても、おわかりにならないでしょうが、ぼくたちの班長です。けど、この人も、たいしたことありません、ピンポンをしても、ぼくになかなわないのですから。でも、この人は、いつも、あらさがしをします。じぶ

んのうけもちのしごとをしながら、あつちを見たり、こっちを見たりするのです。

「ワン・バオ、だめ、このまきかた、ゆがんでる。」

しばらくすると、また——

「ワン・バオ、きみのまきかた、ゆるすぎる。」

みなさん、ことわっておきますが、ぼくのうけもちのしごととは、ぼくたちぜんたいのしごとの中でも、いちばんいいじなどころで、科学のほうでは電磁鉄といえます。つまり、起重機が鉄片をすいあげるのは、まったく、こいつの力なのです。

みなさん、ことわっておきますが、ぼくのやっているしごととは、とつてもたいへんなのです。二十八番のエナメル線を木のじくにまきつける、それも、きっちりそろえてまきつけるのです。ですから、このしごとは女の子だったら、うってつけなのです。ところがぼくは、あいにく女の子じゃない。

問題はそこなのです。

だのに、スー・ミンフォンはこういった問題に、ちつとも気がつかないのです。そして、こつちがとつてもほねおつて、あせが鼻のあたまでふきだしているというのに、もん

くのいいずめなんです、ああの、こうのと。

ぼく、はらがたちました。

「こうしてもだめ、ああしてもだめって——きみ、やって。」

スー・ミンフォンがいました。

「よし、ぼく、まくから。きみは、まきあげ機のハンドルつくるんだ。」

まきあげ機のハンドルって——これほどいいなものはないんです。ハンドルのこしらえてくつけないことには、まきあげ機がまわらない、だから起重機のうでがあらならない。

うでがあらなくては、起重機だなんていえません。だからぼく、とってもよろこんではじめました。ぼく、この工作ゼンたいにとつて、だいいなはたらきをしてみたいと思ったのです。

ところがとつぜん——スー・ミンフォンが大声をあげました。

「ちがう、ワン・パオ。きみ、『Z』みたいなかたちにしちやったじゃないか。ここところは直角にならなきゃだめなんだ。」

ぼくがやつとなおしたと思うと、スー・ミンフォンがまた

はじめました。

「ほら、鈍角になっちゃった、だめだな。」

「どうしてだめなんだい。」

「これじゃ役にたたないよ、動かせないもの。」

「なに、動かせないって。」

だれかがくちばしをいれました。

「これじゃ、まるつきりハンドルらしくないや。人間が、ほら、プールのふちで、とびこみのしせいしているみたいじゃないか。」

そういわれると、たしかにそう見えます。みんながわらいだしました。ぼくはハンドルを地べたになげつけました。

「なんだと、人のことをひやかしやがって。ぼくやめた、ぼくぬけるから。」

ぼくは、しゃくにさわって、地べたのものをけちらかすなり、外のほうにかけだしました。

スー・ミンフォンが追いかけてきました。

「ワン・パオ、ワン・パオ。」

「いいんだよ。」

「ワン・パオ、いけないよ。その態度はなんだ。」

「うん、きみは態度がいいんだよ。とてもいいんだ、すばらしいんだ。いまに『中国少年新聞』にきみの写真がのるから。」

「ワン・パオ、こんなことしていたら、だれも、きみに賛成しなくなるぜ……。」

「きみたちの賛成なんて、ありがたくもないや。」——ぼくはふりむきもせずに出ていきました、なみだがあふれてきそうになりました。

スー・ミンフオンのことだから、きつと追っついてきて、ぼくに帰れていうはずです……けど、ほかの友だちがみんなとめました、「ほっとけ、ほっとけ。」と。

こういうわけで、ぼくはいっそう、はらをたてました。「よし、友だちがいのないやつらだ。かってにしろ。」

ぼくは家へ帰って、ふさぎこんでいました。しばらくして、もういちど学校へいって、みんながどこまでこしらえたか見てやろうと思いました。けど……とってもぐあいがわるいのです。そのうち、ぼくはじぶんにいきかせました。

「いいさ、電磁起重機なんて。——たかが、おもちゃじゃないか。どうだっていいさ。」

こんなことをあれこれ考えているうちに、たからのひょうたんのことを思いだしました。ぼくは、もちろん、たからのひょうたんを電磁起重機にむすびつけたのです。それからまた、いろいろなちがつた問題にもむすびつけたのです。そのいろいろな問題については、いまお話しません。なぜって、三日三晩かかったってお話しきれないんですもの。それに、そのあと、いったい、なにを考えたのか、ぼくにもわからなくなりました、なぜって、ぼく、いねむりしちゃったんですもの。

ようくねむっているところへ、ふと、声がしました。

「ワン・パोकun、魚つりにいこう。」

「だあれ。」

「早くこいよ。早く。」

ぼく、そのとき思いだしました、だれかと、きょう、魚つりにいくやくそくをしたつけ。ほら、えさまで、ちゃんとそろえて、つくえの上においてある。ぼくはいそいで、つり道具をもち、小さいばけつをさげて、声のするほうへかけていきます。

ぼくは町を出て、川べりまできましたが、友だちはひとりもいません。

「みんなどこへいったんだ。なんで待つてくれないんだ。友だちがいない。」

あとでまた、じぶんにいいきかせました。



「いっそ、このほうがいいや。友だちといっしょだと、みんながたくさんつって、ぼくが一ぴきもつれなかったら、つまらないもの。やつぱり、ぼくひとりのほうがいい——おけいこにもなるから。」

けれど、きょうの成績はやつぱりかんばしくないのです。

ぼくは川べりのやなぎの木の下に、ぼつつりと、こしをおろしていました。ぼくのそばには例の小さなげつがおともをしています。そのげつの中には、たにしがひとつ、所在なさそうにころがっています——からだを横にしながら、からの中から頭をのばして、あたりを見まわしています。だれかお友だちがみつからないかなあ、というようなかつこうで。

ぼく、どのくらい、こうしていたかわかりません。というのは、ぼく、からげつをさげて町へ帰りたくなかったからです。せめて、一ぴきぐらいは、つらしてもらわないと、こまるのです。ぼくはあいかわらず、つりぎおをつきだしています。だんだん気がたってきました。

「いまにみろだい。」

お日さまはもう、しずみそうになりました。川の流れる金色の光がきらめいています。ときどきはピチャツという音が

して、水が輪になります。それが、だんだんひろがってき
て、ぼくの糸をゆすります。糸があがつたりさがつたり、ゆ
らゆらします。こうなつては、さかながみんなおどろいて、
にげちまうにきまつています。

ぼくは大声をあげました。

「だれだ、じゃまをするのは。」

するとへんじをするものがあります——かえるがいない
ようでもあり、人がしゃべつてるようでもあります——

「カッコロ、カッコロ。」

「なに。」

またなんべんか「コロ、コロ。」となきました——でも、
よくきいてみると、なにかしゃべつているようです、なんだ
かこういつているようです——

「わしじゃ、わしじゃ。」

「だあれ、きみは。」

へんじは、やつぱり「カッコロ、カッコロ。」です。それ
が、一度は一度と、だんだん、ことばになつてきこえます。

「たからのひょうたん……たからのひょうたん……」

きけばきくほど、はつきりしてきました。

「なに。」ぼくはつりぎおをなげすて、とびあがりました。
「たからのひょうたん？……まさか、ききちがいじゃある
まいな。」

すると、その声がこたえました——やつぱり、かえるのな
き声みたいですが、たしかにことばになつています。

「だいじょぶ、だいじょぶ、ききちがいじゃない。」

「えつ、じゃ、きみはお話の中のたからのひょうたんなの。」
「そうじゃ、そうじゃ。」——ことばは、だんだん、はつき
りしてきます。

でも、ぼくには、そう安心がなりません——

「ねえ、きみ。きみは正真正銘、たからのひょうたんなの？
ほら、あのあの——た、か、ら、の、ひょう、たん——わ
かった？——あのたからのひょうたんなの？」

「わしは正真正銘、たからのひょうたんじゃ。」

そのへんじは、まるで、はつきりしています。

ぼくは頭をつるりとなでてみました。ぴよんとはねてみま
した。それからじぶんの鼻をつまみました。じぶんのほっぺ
たを力いっぱいねりました うん、いたいや。

「これなら、ゆめじゃない。」